

一年の進歩

最近の五週間のうちに、続けて二年が過ぎた。これでようやくほんとうに年を越し、民国十三年歳次は甲子の年になった。“猪の年”を思い返せば、国内では少なからぬ重要な変化が起きたけれども、わたし個人にとっては一歳バカになった他には、実に話せるような良さは乏しい。だがよく考えてみるとまるきり進歩がないとは言えない。これがわたしがまだなんとか慰めになると思う所である。この一年でのわたしの唯一の進歩は、自分に知る所がないのを知ったことである。以前わたしも自分から知る所はある、古今の賢哲の中に一人師匠を見つけ、それを典拠として、主観を形成し、一切を評量できるだろう、これは簡便な方法であると考えた。しかしそのような師匠は後になるとだんだん見つけにくいように思われ、そこで思わず狼狽し、盲人が杖を失ったようになった。他人の出来合いの話は聞こうとしないし、自分でも又意見を考え出せない、帰結するところは真面目に白状するしかない。モンテーニュ(Montaigne)の言葉を借りて“わたしは何を知っているか?”と。わたしは毎日新聞を読むが、実はどうも気持ちがぼんやりしているのだ。政治・外交上の様々な確執については往々にして誰が是で誰が非なのか理解できない。両方の話がどちらもそれもそうだと思うし、又どちらも当てにならないと思う。わたしは常々、まさか自分には“良知”というものがないのではないかと疑っているのだ。“どうもそのようだ”と答えざるを得ないように思うのだ。わたしはその言葉がきっと王学を提唱する友人をととても不愉快にするに違いないと知ってはいるのだけれども。ほんとうに、わたしの心は確かに空っぽで、まるで古い宮殿のあの椅子のように、——だがこれもなかなかさっぱりした事だ。わたしもし一つの“単純な信仰”、あるいは一つの固執した偏見を見つけることができたなら、わたしは考えを持ったことになり、自ずと満足してかつ快活になれるだろう。しかし偏見を持ったものがそれを取り除こうとしてももちろん容易でないし、持たないのに探してこようとするのもいささか困ったことである。たぶんわたしの知る所がないのは今日に始まったことではなく、以前は自分で知っていると思っていたに過ぎないのであろう。いま突然覚悟したのは、ほんとに好い事で、特に補救の方法を探す必要がなくて済む。現れた馬脚こそほんとうの足であって、自ら知る所なきを知ったのはわたしの第一の真知であるからである。

わたしはうれしい、この機会に、以前新聞雑誌の原稿をわたしに読むようにと寄せられた各位に声明できるのは、わたしは“批評を乞う”という文字が押されたさまざまな文章を受け取ると、どうしても懸命にお相手をしたいとは思うのだが、上に述べたようにするに如かずで、実際批評はできないし、敢えてする気もないのである。もし無理やりわたしに好し悪しを言わせようとするなら、主任試験官に倣って脚で一蹴りするしかない、——だがこれは当然当てるには全くもって足りない。わたしもかつて世の中にはアーノルドのような大批評家がいるとは聞いたことがあるが、アーノルドならよいが、わたしではダメである。わたしはただできるだけ多くの大批評家の言論を読み、自分の見識を広めようと思うだけで、朱筆を執って他人の文章に点を入れようなどと言う考えはない。だから“批評を乞う”という要求に対しては、常に“御下命にはお応えできません”*で、一切ご諒察賜わらば幸いである。(民国十三年二月)

※初出：1924年2月13日『農報副刊』

*原文は”有方尊命”、カッコがついているので尺牘の常套句なのか。周作人の松枝氏宛の解説では、方を違背と解すとあり、命に従ってやることはできないと言う意味とある。”尊命に方^{たが}あり”と訓む。